

JICA 専門家のカリブ奮闘記(2)

流通をかんがえる島ぐらしー地のもののありがたみー

中村隼人



2022年の夏は今のところ当地よりも本邦の方が厳しい暑さや風雨に見舞われていることかと思えます。特に、この原稿を書いている8月末には沖縄に巨大な台風が近づいており、沖縄各地の嵐の前、買いだめの状況をみると、島でくらすことの厳しさを改めて感じます。当地は、現在のところ、ハリケーンに襲われるといった被害はないものの、今年の雨季は突発的な雨が降ることが度々あり、

本邦の危険な雨量とされる量の4分の1ほどでもすぐに道路が水浸しになっています。我が家は(第一回に写真でお見せしたような海に面しているわけでもなく)サトウキビ畑や草原が広がるちょっとした丘の上に位置しているため、退勤時に夕立に遭うと道路が滝のようになり、排水がしっかりしないとこんな「景色」になるということを目に焼き付けています。

台風やハリケーン以上に、新型コロナで国際物流が滞った際には、特に中心国ではない小さな島国ではスーパーでの品ぞろえに直に影響します。着任直後、オンラインで行われる様々な会議では様々なモノが輸入できなくなった事例などが紹介されました。当地では幸いにも地域の中心国であるため、物流が滞ることで暮らせない…と言うほどのことは、少なくとも2021年9月以降に経験することはなかったのですが、品ぞろえに疑問符が付くことが時々起こります。当地は、シンガポール人が経営するアジアショップが一か所あり、それなりのアジア食材がかりうじて手に入りますが、モノによっては「次の船まで」といわれることが多々起こります。日本米、きくらげ、だし昆布、うどん、はたまた冷凍の大阪餃子まで、あったらコンスタントに買っておくようにしています。



現地アジア食材店で手に入る品々。

常時あるとは限らない

それ以上に、小さな国であるために、普段の食材は輸入食材に囲まれています。バルバドス人、あるいは周辺のカリブ諸国の人たちが好んで口にするような食材であれば供給に問題はありますが、好みから少し外れるようなものに関してはある程度の覚悟を要します。私にとってはトマトジュースが要注意アイテム。当地のジュースコーナーにはオレンジジュースやパイナップルなど定番のジュースをはじめ、ハイビスカスの花やバルバドス・チェリー等、糖分をたっぷり含んでそうなジュースの箱が輸入・ローカル問わず並んでいるのですが、トマトジュース(およびトマト色をした野菜ジュース)だけはこの半年超、運に左右されてきました。ここ1、2カ月はなぜか入るようにはなってきたのですが、ハリケーンなのか、コロナなのか、はたまた弱い物流網のせいで、またスーパーの棚からトマトジュースが消えないかとおびえながら家にせつせとトマトジュースを買いだめしています。ラベルをみると、やはり米国からの輸入。物流のありがたみを日本以上に日々感じています。



我が家のトマトジュースのストック。
これぐらいないと安心できず



ブライトンのファームマーケット

そんな暮らしがあるだけに、地のもののありがたみはひとしおです。我が家から車で5分ほど行ったところに土曜日の午前中3時間だけ開かれるファームマーケットがあり、新鮮な露地野菜が手に入ります。その他、道端や教会など観光客が行かないようなところで露地野菜の市が立っていることが度々あります。いずれも季節によって微妙に品ぞろえに違いがあつたりするものの、季節の変化が雨季と乾季ぐらいしかない当国においては、季節を感じられる貴重な機会です。



新鮮野菜が並ぶ、ただしさすがにアボカドは輸入品(メキシコ産)

農産物だけではなく加工品でも地のものがあります。スーパーでは、値が張るもののバルバドスの国旗の入った自家製ソーセージが売られています。日々の買い物をセーブしながら時々値の張るローカル高級食材を週末に堪能するのもちょっとした楽しみの一つです。自粛の嵐が吹き荒れた昨年のクリスマス時期にはローカル企業がバナナや、タマリンド、パイナップルやグースベリーをつかったローカルワインを開発して、ショッピングモール等でプロモーションをかけるなど、コロナ後を見据えた地元活性化の取り組みなどもありました。



バルバドス産ソーセージ



ちなみに、カリブの人の好みは(ジュースに見られるように)甘いのか、ワインは甘口ワインからセール値が付くことが多く、味見でもらったタマリンドやパイナップルワインも極端に甘く、甘いものが苦手な私にはまったく合いませんでした。一番甘くないというバナナワインを買って家で試したものの、その後はもっぱら外国産ワインか、(甘くない)ホワイトラム。私に合う地のものをあれこれ試す日々を過ごしています。

バナナワインは自作のカリブ・バルバドス料理(ブルジョル/ケールのココナツ煮のクーケー添え)とともに



中村隼人 (なかむら・はやと)

カリブ災害緊急管理機関(CDEMA)総合防災政策アドバイザー
(JICA 個別専門家)

日・英の大学院(開発/法律)卒業後、本邦の防災情報のコンサルティングを専門とするNPO、国連の本邦ベースの防災協力事業、東ティモール国立オンブズマン事務所専門家(スペイン国際協力開発庁 AECID 派遣)を経て、2011年よりJICAフィリピン事務所企画調査員(防災/災害リスク削減)を延べ6年勤め上げる。その後2017年、JICAミャンマー事務所企画調査員(防災/環境/メディア、及び広報担当)を経て、2021年より現職。国連勤務時代の2009年に、JICAと国連の協力のもと、JICA兵庫(当時)の「災害に強い学校」研修のコースリーダーを担当したのが、はじめてのJICAとの関わり。大学院時代の研究対象の一つがグアテマラ(先住民族の土地利用と開発)だったため、バルバドスへの赴任が久々の中米・カリブ地域の業務。佐賀県生まれの東京都(郊外-南多摩地域)育ち。2017年9月より名古屋工業大学高度防災工学 研究センター客員准教授拝命。